



いづみ

No.35

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 5



《風のアーチ》

伊藤 隆道

自作自選 5 作者の言葉

この作品が設置されている中国・上海月湖彫刻公園は上海市郊外にある月湖という湖の周囲一帯に国際的な作家の野外彫刻を展示している世界的にも評価の高い彫刻公園です。

この作品は湖に直接面したところに設置したもので、17^m四方の床面上に直径130^{mm}のステンレス鏡面パイプを使い、円弧で構成した作品です。4点の連作の一つで、湖の水や空、太陽など自然の変化で表情を変え、周囲の空気や光も表現素材の一部として重要な役割を担っています (伊藤 隆道)

タイトル	《風のアーチ》
設置場所	中国・上海 月湖彫刻公園
制作年	2007年
素材	ステンレス

連載 宮の森の四季 5 本郷新記念札幌彫刻美術館

展示の力

職員 松島 幸和

私的なことでありますが、一昨年秋のことです。当時勤務していた札幌市民ギャラリーで、「100歳おめでとう展」なるものを開催しました。義母の数え100歳を記念して、ギャラリー勤めの私らしい祝い方がないものか、と考えた末の展覧会でした。

義母の年齢による体調不安、新型インフルエンザの流行、また、近くなって大型台風の動きもあり、期日迫っての、ハラハラドキドキの開催決行でした。もともと本人の描きためてあった絵手紙などに加えて子供や孫、ひ孫が作品を持ち寄って交流できればという程度の軽い気持ちもあり、隣近所に案内した程度で当日を迎えました。

ところが、いざ作品を持ち寄り、飾り、眺めてびっくり。その数の多さ、バラエティーの豊かさ。例えば、義母の家に我々みんなが集まった、そんなイメージ写真をデジタル技術で再現した孫、また、アンティークの家具を持ち込み、会場の雰囲気づくりをしてくれる人など、展覧会慣れの私も予想以上の出来上がりに満足でした。友人の手配で、北海道新聞にもその展覧会の内容が掲載されました。朝から新聞の切り抜きを携えながら会場を訪れてくれた人、友達を誘ってきた人など、当初予想の5倍にも達する来場者でした。「長生きしてね」「頑張ってね」見ず知らずの方々の声を受け、元気な義母が一層、元気に見えた2日間でした。

本郷新記念札幌彫刻美術館は、本年30周年を迎えます。15回目を迎える本郷新賞の受賞展をはじめさまざまな展覧会、ワークショップ等を企画しています。展示の力を駆使して、さらなる本郷新の作品の魅力、その人となりを紹介、広めていきたいと思っています。

あなただけの場所をつむぐ市民の力

小林 英嗣

(NPO法人モエレ・ファンクラブ代表理事)

2011年正月、「貴会をNPO法人として認証します」という、うれしい連絡が北海道庁から届きました。振り返ると、市民から積極的に公園の活用を提案し、市民と行政が協働した運営を目的に2003年5月、「モエレ沼公園の活用を考える会（モエレ・ファンクラブ）」が発足しました。その後、公園を楽しむコンサート、展覧会や連続講演会、書籍や写真詩集・ガイドブックの企画・出版、地域の子どもたちとの体感ワークショップ、エコや地球環境を考えるシンポジウムやイベントなどを毎年、楽しみながら多くの方々と協働で運営してきました。

モエレに行くとき次世代を担う子どもたちが大地に刻まれたイサムの心や見えない言葉を体中で受け止め、公園と呼吸している姿に感動し、モエレ沼公園が「子どもたちの志を育む風景」となっていることに気づき、私はイサム・ノグチの言葉「Looking for Frontiers（フロンティアを求めて）」を思い出します。「表情を失った広大な大地」にイサムの生涯を埋め込んだ生涯最大のプロジェクト、「全体を彫刻とみなした、宇宙の庭になるようなモエレ沼公園」。訪れる誰もが遮るものがないスケールと空の解放感に感動し、大地に刻み込まれたイサム・ノグチのメッセージを公園のいたる

所で体感し、一人ひとりが自然や風景の一部になって、思い思いに創造的な時間を過ごしています。

札幌とその周辺にはこのような大地と結びついた彫刻公園が多くあります。札幌を訪ねてきた友人には必ず、「あなただけの場所を探しに行きましょう」と、モエレばかりではなくアルテピアツァまでも足を延ばしながら、大地の魅力へ誘います。そこから見た碧い空、風が運ぶ大地の匂い、鳥の声、大地へ吸い込まれていく夕陽、またたく星。自分だけの安息の場所の発見ができるからです。

20年後、50年後、100年後には、これらの公園はどんな姿になっているのでしょうか。モエレ沼公園をはじめ、札幌圏の公園の未来、そして魅力の継承・共創。それは公園に集うすべての人の手に委ねられているのでしょうか。イサム・ノグチが私たちに残していった宿題への旅路は広く、かつ深い。

この原稿を書いている今、遠い国では、長期の独裁政権が市民の手によって内部から崩壊しつつある。そして、一市民がすくくと立ち上がる力のすごさを感じながら、久しぶりの明るい陽射にきらきらと輝く雪舞を眺め、「一市民であろう」と改めて約束している自分に気がつきます。

《無辜の民》に魅せられて

高橋 淑子（会員）

《無辜の民》と題された 14 点の作品を 2005 年、「生誕 100 年本郷新展」（札幌芸術の森美術館）で見る機会に恵まれた。展示されている一室に入ると誰もが息をのむような、虚無と絶望と放心の象徴である、布をまとった高さ 30 ㎝ 足らずの人々が待っていた。監視員の眼さえなければ、この手で包み込んで一緒に嘆き、嗚咽したい感傷の渦が私を襲った。いつまでもその場を離れがたく、彫刻の声なき声を聴くことが悲しくもあり、なぜか心地よさも感じられる良い出会いであった。

本郷新は 1970 年、戦火の絶えない中東やベトナムの地に触発され、15 点の《無辜の民》を作ったという。《油田地帯 I・II》《砂漠の女 I・II》《乾いた砂》など、始めに造られた作品では、布は女性の体にまわりつく、ため息のような優しさがあるが、次第に人体はゆがめられ、布はきつく巻きついていく。戦争の悲惨さを奥へ、奥へ閉じ込めながら本郷新の静かな怒りと祈りは焼成されていったのだろうか。《虜われた人 I》に至っては顔まで巻きつく布から 2 本の足と苦しげな右手を突き出しただけの悲惨な姿となる。

その《虜われた人 I》は 2 点もの大きな作品に仕上げられ、1971 年、箱根彫刻の森美術館主催の第二回現代国際彫刻展に出品された。小品とはまた違う圧倒的な存在感が、見る人をわが身に置き換えて不安にさ

せる。この無言で訴える女性の悲しみは、戦争のみならず、風雪に耐えた北海道開拓民にも通じる一と《無辜の民—石狩》と名をつけて、荒涼とした浜に設置されることとなったのは、本郷新の希望であった。

『この地に生き、この地に埋もれし数知れぬ無辜の民の霊に捧ぐ』の碑文を 1979 年に用意した本郷だが、翌年 2 月、東京の自宅で 74 歳の生涯を閉じる。《無辜の民—石狩》がこの碑文とともに《石狩—開拓者慰霊碑》として晴れて除幕式を迎えたのは、1981 年 7 月 1 日のことで、これは札幌・宮の森に、本郷が寄贈したアトリエをもとに、札幌彫刻美術館が開館した翌日のことだった。

設置から 30 年を迎えた《無辜の民—石狩》は石狩浜の厳しい自然に耐え、荒海から開拓民を運び込んだ船に見立てられた台座の上で本郷の遺志により納められた分骨と共に、私達を待っている。芸術の森美術館の一室で動けなくなった私に、今度はどんな感動をもたらしてくれるのか。この 5 月、《無辜の民》を含めた石狩方面へのアートツアーを友の会で計画途中である。今からそのバス旅行が楽しみである。

石狩方面日帰りアートバスツアー予定

5 月 19 日（木）「無辜の民」鑑賞と彫刻家・川上りえアトリエ訪問、戸田記念公園散策などを計画途中。

空間表現の場

「ハルカヤマ芸術要塞 2011」今秋開催へ

渡辺 行夫 (会員・彫刻家)

かつて本郷新のアトリエがあった隣接地、小樽市春香町の 8,800 坪の土地を利用して、別名「春香山復活プロジェクト構想」を思い立ったのは 3 年前の 2008 年のことだった。一時は観光ホテルが建ったこともあり、石狩湾が眺望できる風光明美な土地で、ここに北海道在住のアーティストに呼びかけ、地域の活性化と表現の可能性を模索する拠点にしようと考えた。このプランは 09 年 7 月発行の友の会会報「いずみ」28 号にも寄稿した。

その時にも書いたが、以前から一人で気楽に石を彫ったり、積んだりしながら自然の中で遊ぶ空間がほしかった。そんな折、この土地を貸してもらえなくなった。当初は 300 坪ほどの土地があればと思っていた。8,800 坪の土地は広過ぎるといささか戸惑うところもあったが、持ち主が石をテーマにした空間作りに興味を持っていたこともあって話がまとまった。しかもこの場所は不思議な魅力があり、同じような考えを持っている人たちがいたら力を合わせて、特色のある多目的空間作りをしようと思ひ、「春香山復活プロジェクト構想」が生まれた。

時間、資金、労力、家族や他人の意見などいくつかの問題はあったものの、やがて協力者を得、門柱を立て、道を造り、間伐し、笹を刈り、ゴミを拾って本郷新のアトリエまで車で行けるようになった。9 基の彫刻を設置することが出来た。

こうして昨年秋、美術仲間である阿地信美智さんとの話し合いの中から、「ハルカヤマ芸術要塞 2011」のアイデアが浮かび上がった。ちょうど、「北海道立体表現展」が昨年、10 年間の区切りで終了したことから、それに代わるものを模索している時期でもあった。表現展へ出品していた仲間とも意見交換しながら、何とか始めようということになった。

名称は「ハルカヤマ芸術要塞 2011」—英語表記にすれば「Harukayama art fort 2011」ということになる。場所は小樽市春香町 314 で、JR 銭函駅から徒歩 30 分、JR バス小樽行き「西春香山」下車徒歩 2 分のところに位置する。会期はとりあえず 9 月 25 日から 10 月 22 日までだが、7 月 30 日からをプレ会期として作品の制作段階から見てもらう計画だ。このほか、24 日のオープニングパーティー、25 日にはアーティストトーク、ワークショップなどのイベントも考えている。

彫刻、立体造形、インスタレーションなど、さまざまな切り口から、この空間を取り込んで表現してもらいたい。また、来場者には作品を介して、自然と人生との共生、人間の立ち位置などを再考するきっかけとなることを期待している。

どのような展開になるかはまったくわからないが、個々の表現者が意欲的に、一度見放された土地の蘇生を試みてほしいと思う。

2011年友の会新年会盛況

野坂北大教授講演「感じることと知ること」

友の会ホームページ試作画面も披露

友の会の2011年新年会と講演会が1月23日、札幌・パークホテルで催され、講演会のあとビンゴゲームや公開準備を進めている友の会ホームページの披露などがあり、参加者50人が新しい年の飛躍を誓い合った。



開会の挨拶で橋本信夫・友の会会長は「今年は友の会も発足30年の節目を迎える。近年は彫刻の清掃や解説の講師を依頼されるなど、会の活動もかなり認知されてきた。幅広い活動を通して30年にふさわしい年にしたい」と新年の抱負を述べた。

新年会に先立つ講演会は野坂政司北大大学院教授を講師に迎え、「感じることと知ること」を演題にIT時代の中でアート情報とどう向き合うべきかの含蓄ある講演を聴いた。野坂教授は「琴線に触れる」という言葉の語源を中国の故事を引きながら、「感情が揺り動かされ、深いところで反応することが情報の根源」と語り、自身が米国のサンフランシスコなどで見聞したさまざまなアート情報の例を紹介しながら、「感じることと知ることが深いところで交流するような情報の提供が必要だが、現在は感じることより知ることだけが増幅しているのではないか」とアート情報の現状を指摘した。



新年会では友の会のホームページ制作状況が報告され、細川房子会員が試作のページをスクリーンで紹介した。会場からは「よく出来ている」「早く見たい」などの声が多数聞かれた。さらに、参加者全員に賞品が当たるビンゴゲームで会場盛り上がった後、男性出席者がステージに上がり、にわか合唱団と共に全員で「オホーツクの舟唄」を歌ってにぎやかに会を閉めた。

DVD 第7作完成

「朝倉文夫の《木下成太郎像》」

“中島公園の忘れられた彫刻、に焦点

友の会が札幌市生涯学習ちえりあが公募する教材ビデオ制作に応募、橋本会長が中心になって昨年から作成していたDVD「朝倉文夫の《木下成太郎像》」がこのほど出来上がった。ちえりあシリーズとしては連続7作目。

木下成太郎は戦前の北海道出身国会議員、東京・大東文化大、武蔵野美大の創設者として知られる人物。中島公園にひっそり立つその像に友の会の会員が気づいたことから、思わぬ歴史の重みなどが判明、友の会が中心となってシンポジウムを開くなど、話題になった。

DVDには少ない資料を活用して、木下の生涯から文化的活動、業績など木下の人物像を余すところなく紹介、さらに成太郎像を制作した朝倉文夫についても貴重な写真でプロフィールを紹介するなど、木下像にまつわるすべてが約16分間の映像にまとめられた。

作品はちえりあの視聴覚教材として活用されるほか、一般にも頒布される。

幻想の世界を創出

「ゆきあかり in 中島公園」に協賛

札幌・中島公園の冬の夜を彩って2月11－13日に開かれた「ゆきあかり in 中島公園」に友の会も参加、紙コップを利用したキャンドルを公園内の園路に飾り、幻想の夜を作り出した。

この催しは同公園周辺の住民や団体などが中心となって実行委員会を作り、さつぼろ雪まつりに合わせて開いたもので、地域に住む会員も多いことから今年初めての参加になった。

会場を訪れた人たちに紙コップの表面に思い思いのイラストや文字を書いてもらい、それを通り



道に吊り下げて夜の中島公園を彩った。3日間にわたって午後4時半から8時まで、橋本会長夫妻をはじめ長峯会員夫妻などが厳しい寒さに耐えながら、行き交う人たちにキャンドル作りを呼びかけた。

会の活動に手ごたえ

長峯会員桑園地区フォーラム参加

昨年12月17日、大通高校で開かれた「プレゼンテーション大会

2010」の「桑園地区地域連携フォーラム」に招かれて、長峯慰子会員が友の会の活動状況を発表、今後の同地域との連携に手がかりを得た。

これは同高校が地域のために何ができるかを地域で活動している団体と話し合い、共に考えるという趣旨で開かれたフォーラム。

友の会のほか、桑園地区町内会、交通安全母の会など10の団体が活動を紹介した後、青少年支援、地域・環境交流、町内見守りの3つのテーマについて生徒と団体の参加者が意見交換をした。友の会は「地域・環境交流」に参加、札幌の文化を知り、街なかの美を守るという会の活動に生徒たちが関心を見せたと同時に、他の参加団体からも協力して活動したいという声も上がった。

地図コンテンツ構想熱弁

橋本会長道地域ネットワーク協議会で

橋本会長が特定非営利活動法人・北海道地域ネットワーク協議会(NORTH)＝辰巳治之会長＝の要請で3月7日、札幌医大記念ホールで開かれた同協議会主催「第17回NORTHインターネット・シンポジウム2011」で講演した。

友の会が進めている彫刻地図コンテンツづくりについてその進行状況と構想を詳細に報告、出席した人たちからユニークな活動

に深い関心を示す人も多く、今後の展開に期待が集まった。

友の会ホームページ誕生

会報既刊号も読めます

懸案だった友の会のホームページ(HP)が立ち上がり、会の活動などがインターネットで見られるようになった。

ホームページは奥井、細川会員らが専門家のアドバイスを受けながら作成した。HPの顔となる薄いグリーンを基調にした表紙のほか、会の活動、入会案内、会員ページなどで構成し、会のモットー、目的のほか、日ごろの活動状況、イベント情報を載せている。さらに、これまでの会報「いずみ」の既刊号がすべてHPで見られる。

URL <http://sapporo-chokoku.jp>

2011年度友の会総会

4月24日開催

2011年度の友の会の活動方針などを決める総会は4月24日(日)午後1時から、札幌市資料館(中央区大通西13丁目)で開催する。

2010年度活動報告、決算・監査報告、2011年度活動計画、予算などの議案を審議する。例年、総会終了後行なっていたシンポジウムは行なわず、昨年度一年間の活動を映像で振り返る。

事務局日誌

▼1月13日＝定例役員会(エルプラザ) 新年会実施要領協議、2011年度総会会場決定ほか。終了後、3役などで市文化部長表敬訪問
▼19日＝ホームページ部会(エルプラザ) ▼21日＝会長ほか3役で彫刻美術館で佐藤館長から65歳以上の入館料についての説明を受ける ▼23日＝2011年新年会開催(札幌パークホテル) 出席者50人 ▼2月10日＝定例役員会(エルプラザ) ホームページ作成進行状況報告、会員メールアドレス作成、メセナ会員勧誘などについて協議、会報「いずみ」35号編集企画協議ほか ▼11-13日＝中島公園の「ゆきあかりin中島公園」に参加 ▼23日＝総会議案作成について4役会を開き、分担など決める ▼28日＝ホームページ部会(エルプラザ) 友の会ホームページ開設のためのドメイン取得、サーバー手続きなどについて協議 ▼3月10日＝定例役員会(エルプラザ) 会報「いずみ」35号校正、総会準備など協議

札幌彫刻美術館友の会
会報「いずみ」No.35
2011年4月1日発行
発行人 橋本 信夫
編集スタッフ
斎藤美年子：011-643-7246
大内 和：011-884-6025
印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」35号 目次

自作自選 5 《風のアーチ》 伊藤隆道	表紙
作者の言葉	2
宮の森の四季 5 「展示の力」	2
巻頭言「あなただけの場所をつむぐ市民の力」 小林英嗣	3
「無辜の民に魅せられて」 高橋淑子	4
「ハルカヤマ芸術要塞2011」 渡辺行夫	5
友の会ニュース	
友の会2011新年会、DVD第7作完成、友の会HP公開へ	6-7
事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか	8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本館

■前期収蔵品展 とり・うま・こども一生きもの語りー

会期：4月2日(土)～5月15日(日)

■札幌彫刻美術館30周年記念

抽象彫刻30人展ー北の作家たちー

会期：5月21日(土)～7月10日(日)

記念館

■土と火の祭りーテラコッタ展ー

会期：4月2日(土)～8月21日(日)

本郷新記念札幌彫刻美術館 札幌市中央区宮の森4条12丁目

☎011-642-5709

編集後記

▼本郷新が旧制札幌二中(現札幌西高)を経て北海中学を卒業したことは知られているが、過日、手元にある冊子で、本郷が二中にいた「痕跡」を確認した▼二中時代から続く札幌西高の同窓会・輔仁(ほじん)会が昭和48年に出した『『輔仁』札幌西高校60周年記念号』の匿名原稿「二中国人国記」にこんな一文があった。「本郷新(彫刻家)は2年迄在学して北中へいった。反骨精神で貫いたところはなかなかの人物である」▼本郷は二中8期生。ちなみに同期には坂本竜馬の曾孫で、山岳画家として知られた坂本直行がいた。巻末の会員名簿には8期の中に本郷の名前、住所も掲載され、60周年記念事業募金に10口応募した旨の記載もある。途中転校だが二中への強い絆を感じていたことがしのばれた。(大内)